

京都大學經濟學會

# 經濟論叢

第六十六卷 第一・二・三號

- 中國史上におけるデフレーションに就いて……………穂 積 文 雄
- 人事管理における基本問題……………田 杉 競
- 經濟關係の計量とその推計學的基礎……………阿 部 統
- アダム・スミスの再生産論……………松 田 弘 三
- N・バロウ「イギリス勞働組合論」……………前 川 嘉 一

---

昭和二十五年九月

## アダム・スミスの再生産論

松田弘三

再生産論の歴史における二つの巨星は、その歴史の始點と終點とに立つてゐるところの、ケネーとマルクスとであると考へられてきた。ケネーは『經濟表』(一七五八年 同『範式』一七六六年)によつて、はじめて資本の全生産過程を再生産過程として敘述し、これを「六つの出發點と歸着點とを結ぶただ五本の線からなる表」のうちに要約することによつて、再生産の理論に對してその礎石を提供した。マルクスは『資本論』第二卷第三編「社會的總資本の再生産と流通」(一八七〇—七八年)において、各々三個の數字を含むところの二行の算術式よりなる「再生産表式」によつて、資本の總再生産過程ならびに總流通過程の全面的な分析を與えた。そしてこのマルクスの「表式」は、ケネーの「表」からの脱化・展開のうゑに生れた。<sup>2)</sup>(一八六三年のマルクスの「經濟表」を見よ。——このことは疑いがなからぬ。

しかしながら、ケネーの「經濟表」とマルクスの「再生産表式」との間には、アダム・スミスの再生産論、即ち『國富論』第二編(一七七六年)が立つてゐる。そして後に敘べるように、マルクスの「再生産表式」の基礎

的命題はケネーにおいてはいまだ問題となりえず、アダム・スミスによつてはじめて提起せられたといつてよからう。そればかりではない。アダム・スミスによつて提出せられた問題のうちには、マルクスによつてその展開を豫定されいながら、ついに充分な敘述を興えられなかつたものが存在するのではなからうか。しかもその問題は、今日の我々にとつてきわめて重要なものと考えられる。ここに、再生産論の歴史のうちから特にアダム・スミスをとりあげ、その再検討を試みる所以である。

- (1) Marx, Theorien über den Mehrwert, Bd. I S. 92
- (2) 山田盛太郎「再生産過程表式分析序論」一一一—七頁 同「再生産表式と地代範疇」(「人文」創刊號)
- (3) Marx, Das Kapital (M. E. L. Institute, Ausgabe), Bd. II Anhang S. 533—536

## 二

アダム・スミスの再生産論は、主として『國富論』第二編「資財 (stock) の性質、蓄積および用途について」に述べられている。先ずその第一章「資財の分類について」を見よう。

スミスは社會の資財一般を分割して、直接の消費のために、留保される資財および資本 (capital) となし、この資本をさらに區分して固定資本 (fixed capital)、流動資本 (circulating capital) の二種類とする。「固定資本の特性はそれが流通することなく、またはその所有者を變えることなくして、收入または利潤を齎すということである。」それは次の四種からなる。一、事業上の機械および器具。二、營業用の建物。三、土地に加えられた改良。四、社會成員の習得した有用な能力 (これを固定資本とすることは正しくない)。これである。次に、「流通資本の特性はそ

れが流通することによつてのみ、言いかえれば所有者を變えることによつてのみ、收入を齎すという點にある。」これもまた次の四種からなる。一、貨幣。二、販賣者の所有する食料品の貯藏。三、衣服、家具および建築の材料。四、商人または製造業者の手にある完成品。これである。(右のうち第一のものは貨幣資本、第二および第四のものは商品資本であつて、ともに流通資本 (Zirkulationskapital) に屬する。スミスにあつては固定資本と流動資本 (Zirkierendes Kapital) との區別と、生産資本と流通資本との區別とが混同されている。)

スミスによれば、「およそ固定資本はもと、種の流動資本から生じたものであつて、またそれによつて絶えず支持されねばならぬものである。」「如何なる固定資本も流動資本なしには收入を齎すことができない。」とされている。(しかしながら、機械器具等の固定資本の生産に、原料生活資料等の流動資本ならびに他の機械器具等の固定資本を要すると同様に、原料生活資料等の流動資本の生産には、機械器具等の固定資本ならびに他の流動資本を要するのであつて、特に固定資本がもと流動資本より生ずるといふ根據は存在しない。流動資本と流産資本との混同にもとづく混亂がここに見られる。)かくして、「流動資本のうちから社會の總資財の他の兩部類(固定資本および直接の消費のために保留される資財)へ編入されるために、大きな部分が絶えず引き出されるのであるから、流動資本は一方においては不斷の供給を必要とし、この供給がなかつたならば、流動資本は直ちになくなつてしまふ懼れがある。その供給はこれを主として三つの源泉、即ち土地、鑛山および漁場の生産物に仰ぐのである。これらは食料品および原料品を不斷に供給し、その一部はやがて完成品に仕上げられ、また流動資本から不斷に引き去られる食料品・原料品および完成品はこの供給によつて補充せられるのである。なおまた鑛山からは流動資本のうち、貨幣からなる部分を維持し増加するに必要なものが引出されるのである。」と。(ここから流動資本・即ち食料品・原料品および完成品は、實は流通資本中の商品

資本である。」「」内の挿入は引用者、以下同様

- (4) Smith, *Wealth of Nations*, ed. Cannan, Bk. II ch. I Vol. I p. 264—265
- (5) *Ibid.* p. 265
- (6) *Ibid.* p. 265—266
- (7) *Ibid.* p. 266

以上に述べたところによつて、スミスにあつては社會的生産が、食料品および原料品を産出する土地・鑛山および漁場即ち原始生産と、完成品を生産する製造業とに分たれ、この對立において考察されていることが知られる。スミスの再生産論は本來この原始生産（農業）と製造業（工業）という二大部分への、社會的生産の分割を基礎とする構想のものであつた。次にスミスがこの兩部分において行われる社會的生産物の再生産と流通の運動について述べているところを見るために、第五章「資本の種々の用途について」を取上げよう。

スミスによれば資本の用途は四種に分れる。即ち、一、原生産物の獲得。二、右の原生産物の加工。三、原生産物または製造品の運輸。四、この兩者の特定部分の小部分への分割。これである。そのうち第一の、「社會の使用および消費に年々必要とせられる原生産物を獲得する」ために使用されるものは、「土地・鑛山・漁場の改良または耕作を企てるすべての人々の資本」である。かかる「土地・鑛山・漁場を經營するには固定資本と流動資本の兩者が必要である。」この兩資本によつて生産された原生産物は、原料品および食料品である。次に第二の資本用途たる、「原生産物を直接の使用および消費に供せんがために製造し加工する」ことに使用されるものは、「すべての製造業者の資本」である。この資本も同様に固定資本と流動資本とに分れ、それによつて生産された工業生産物は完成品と呼ばれる。更に、第三および第四の様式で投下されるものは、「すべての卸賣商人および

小賣商人」の資本であつて、この商人の資本は全部流動資本（實は流通資本）である。<sup>12)</sup>それは原始生産と製造業との間の生産物の流通を媒介するものである。

さてそれでは、この商人によつて媒介される、第一と第二の産業の間の流通はいかに行われるか。その考察は『國富論』第一、二、三編の處々に見られる。第二編第一章において、スミスはいう。「農業者は毎年製造業者に對して、彼がその前年に消費した食料品および彼が加工した原料品を償還する。そして製造業者は農業者に對して、彼がその期間に損傷し消耗した完成品を償還するのである。ただ、一方の原生産物と他方の製造品とが、直接相互に物々交換されることは非常に稀であるけれども、右は社會の二つの階級の人々の間に、年々實際行われている交換なのである。」<sup>13)</sup>と。

またスミスは第三編第一章においてこの流通を、製造業（工業）と原始生産（農業）とをそれぞれの生業としてその上に存立する、都市と農村との間の流通として展開している。即ち、「およそ文明社會といわれるものの大規模な商業は、都市の住民と農村の住民との間に行われるのである。それはあるいは直接に物々交換によつて、あるいは貨幣又は貨幣を代表する一種の紙幣の介在によつて行われる、原生産物と製造品との交換である。農村は都市に對して生活資料と製造業の原料とを供給する。都市は農村の住民に對して、その製造品の一部を返還してこの供給に酬いる。」<sup>14)</sup>と。

おなじ關係は第一編第十章においては、次のように述べられている。「すべての都市はその食料品の全部およびその産業の原料の全部を農村地方に仰ぐ。都市はこれらに對して次の二つの方法によつて支拂いをする。第一に、これらの原料の一部を加工し製造品として農村に送り返すこと、……第二に、他國からまたは自國の遠方か

ら都會に移輸入された原生産物または製造品の一部を農村に送ることによつて。」と。<sup>15)</sup>  
以上の文句のなかに、都市と農村との間の一般的流通がきわめて概括的に述べられている。しかし社会的生れ産過程を全面的に理解するためには、この敘述はなお都市と農村のそれぞれの内部における流通をも考慮に入再て、擴大されねばならぬ。

- (8) Smith, Wealth of Nations, Bk. II ch. V Vol. I p. 340  
(9) ibid. Bk. II ch. I Vol. I p. 266  
(10) ibid. Vol. I p. 340  
(11) ibid. Vol. I p. 340  
(12) ibid. Vol. I p. 262  
(13) ibid. Bk. II ch. I Vol. p. 266  
(14) ibid. Bk. III ch. I Vol. I p. 353  
(15) ibid. Bk. I ch. X Vol. I p. 126

### 三

この都市と農村との分離・對立の問題の重要性をマルクスは次のように述べている。「あらゆる發展せる、且つ商品交換によつて媒介された、分業の基礎は、都市と農村との分離である。社會の全經濟史はこの對立の運動に概括されるともいえる。」<sup>16)</sup>と。しかし彼はこの問題にたち入っていない。

社會的分業と商品生産の歴史はエンゲルスの『家族・私有財産および國家の起源』によれば次のごとくである。即ち、最も低い段階においては人類は直接自家用のためにのみ生産し、交換行爲は孤立的且つ偶然的なものであ

つた。野蠻の中期において、最初の大きな社會的分業である牧人種族と他の後進種族との間の分業が、従つてまた規則的交換の條件が成立する。次に野蠻の上期において、手工業が農業から分離する。これは第二の大きな分業である。生産が農業と手工業との二大主要部分に分裂すると共に、直接に交換のための生産、即ち商品生産が發生する。文明はこれらすべての既存の分業を、就中都市と農村との對立の激成によつて確立し且つ増進するとともに、更にその上に文明に特有の第三の分業を附加する。即ち、自らは生産に従事せずしてただ生産物の交換にのみ従事する一階級——商人<sup>17)</sup>をつくる、と。かくして農業と工業との分業、都市と農村との分離が、商品生産従つてまた商品交換の發生と發展とに對して有する、決定的な意義は明瞭である。それ故にまた、商品生産および商品交換の一般的支配的展開の上に形成される資本家的生産様式をその研究對象とする經濟學において、それは重要な一問題であるといわねばならない。

マルクスは『經濟學批判序説』において、經濟學の編別と題して自己の著述のプランを述べるに當つて「第一、一般的抽象的諸規定……第二、ブルジョア社會の內面的編制を構成し、且つ其本的諸階級を基礎づけているところの諸範疇。資本、賃労働、土地所有。それらの相互關係。」と書いたのち、特に「都市と農村。」<sup>18)</sup>と記して、都市と農村との分離と、その間に起る社會的生産物の再生産と流通の過程を分析すべきことを豫定していたのである。我々はマルクスからこの問題についての、體系的な論述をきくことはついにできなかつた。しかるにかえつてアダム・スミスにおいて、この問題についての敘述を、斷片的且つ萌芽的であるとはいへ、『國富論』の全卷に互つて豊富に見出すのである。

(16) Marx, Das Kapital, Bd. I S. 369



(18)(17) Engels, Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und der Staats, S. 165—172  
Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, Herausgaben von Kautsky, S. 45—46

都市と農村との間の再生産と流通の過程の敘述は、すでにケネーによつてもなされたところである。即ち、ケネーにあつては社會は生産階級（農業に従事するもの）、地主階級、および不生産階級（工業および商業に従事するもの）の三階級に分れる。しかしてケネーによれば農業においては、その生産物よりそれを獲得するに要した一切の費用を控除したのち、なお自然の賜物に相當する剩餘生産物、即ち純生産物がある。しかるに商工業においては、原料の加工乃至移轉による増加價值は、それらの活動の間に消費される生活資料の價值に等しく、即ち費用を超える剩餘生産物は發生しない、とされている。生産階級および不生産階級の名稱ある所以である。『經濟表範式』(Formule du Tableau Economique) は、生産階級の經營資本の再生産を中心として、これら三階級間の社會的生産物の流通分配の關係を、階級相互間の關係として直接的に表現し、且つ諸取引が、時的總體的に行われるものとして表示したものである。それ故に『經濟表』(Tableau Economique) における再生産過程の基本的な楔機は、社會的生産の二大部分——即ち原始生産と製造業とである。ケネーはこの兩部分間の再生産と流通の秩序に對して、はじめて嚴密な表現を與えたといふ。

しかし、この過程について更に詳細にして具體的な分析をなしたことは、スミスの功績であるといわねばならない。一體、スミスは『國富論』第一・二編において國民の富を一般的に分析したのち、第三編においてその史的發展を都市の産業と農村の産業との對立關係において考察し、第四編においてはそれに關する學說を都市の産業を偏重する重商主義と、農村の産業を偏重する重農主義との對立において把握し、第五編においては何れにも

偏せざる自己の自由主義的政策論を展開している。これによつてみれば、スミスの經濟學體系は都市と農村との對立という觀點からも理解しうるほどである。我々はマルクスによつて豫定されつつも展開され得なかつた、この都市（工業）と農村（農業）との關係、殊にその間に行われる再生産と流通の過程についての理論的分析を構成すべき一の鍵を、スミスの敘述のうちに見出すことができるであろう。

さてしかしながら社會的總生産がどのようにその生産物の物的差別に従つて、原始生産（農業）と製造業（工業）との二大部分に分割され、この對立においてのみ理解されているかぎり、社會的總資本の再生産と流通の過程の分析としての再生産理論は成立しえない。なんとすれば、再生産理論は社會的總生産物の價值補填ならびに素材補填の過程を瞭らかにするものであるから、そのためには價值と素材（使用價值）の二重の見地から再生産過程を把握しなければならぬからである。従つて、「マルクスは全社會的生産物を、生産物の現物形態に従つて、（一）生産手段（二）消費資料の二部門に分け、これらの各部門における生産物を價値の要素に従つて、（一）不變資本（二）可變資本（三）剩餘價値の三部分に分けている。」<sup>19)</sup>そしてこれはレーニンによれば「マルクスが彼の理論を立てたところの基礎的前提」<sup>20)</sup>である。

價値の觀點からの不變資本・可變資本・剩餘價値の三部分への區分の問題はのちに述べるとして、先づ素材の觀點からの生産手段・消費資料の二部門への分割についていえば、この區別は素材（使用價值）の觀點からなされるとはいへ、生産物の物的性質の差別（農産物と工産物というような）とは全く異なるものである。レーニンはいう。

「資本主義社會における生産物の實現（即ちそれに對する等價の發見、市場における販賣）に關する考察の出發點となる

ものは、二つの全く異つた形態の社會的生産物——生産手段と消費資料——とを分割することではなければならぬ。前者は單に生産的のみ消費され、後者は單に個人的のみ消費される。前者は資本としてのみ任せ、後者は所得とならねばならぬ。即ち勞働者および資本家の消費のうちに消滅せねばならぬ。前者はその全部を資本家によつて得られ、後者は勞働者および資本家の間に分配される。」と。即ち生産手段と消費資料との區別は、それが生産的消費に歸するか個人的消費に歸するかという、生産物の再生産過程における機能上の差異を基準とするものである。かくのごとき二部門への分割を基礎としてのみ、社會的總生産物の價值補填ならびに素材補填の二重の過程の同時的把握が可能となる。「この一つの分類〔生産手段・消費資料の二部門への分類〕のうちには、市場の理論に關するあらゆるこれ以前の論争よりも、より多くの理論的意義がある。」<sup>22)</sup>といわれる所以もここにあり。しかるにもし、社會的總生産を農業と工業との二部分に分割するならば、一面的に素材の觀點に立つこととなり、社會的總生産物の現物態における補填の關係は理解しようとしても、その價值關係の下における補填の過程は捕捉されえない。かくては社會的總資本の再生産の過程の科學的な理解は不可能となる。

(19) Lenin, Nachmais zur Frage der Theorie der Realisierung, sämtliche Werke II S. 412

(20) Lenin, Die Entwicklung des Kapitalismus in Russland, sämtliche Werke III S. 27

(21) Lenin, Zur Charakteristik des ökonomischen Romanismus, sämtliche Werke II S. 24

(22) Lenin, Bemerkung zur Frage der Theorie der Märkte, sämtliche Werke II S. 403 以下を Bulgakow から引用。

しかしながら、スミスはこの社會的總生産の區分の問題において自己自身を止揚し、科學的な見解への道を拓いているのである。だがそれを述べるに先立つて、さきに保留した生産物の價值構成部分の問題、それに關するスミスの有名な誤謬に觸れておかねばならぬ。

四

アダム・スミスによれば、あらゆる商品、従つてまた社會の年生産物を構成する一さいの商品の價格または交換價值は、賃銀・利潤および地代の三部分に分解せられ、これらが労働者・資本家および地主の収入の三源泉となるとともに、更にまたこれらの三部分が商品の價格のうち、その構成部分として入り込んでいるとされる。スミスのこの誤れる命題は、マルクスによつて「アダム・スミスのドグマ」と呼ばれたところのものである。スミスは利潤および地代が、労働者が彼の賃銀に對する等價を供するところの労働量を超えて、原料に附加える労働の部分からのみ成立しうることを認めているのであるから、彼の命題は結局商品價值が  $\llcorner$  十日 (可變資本と剩餘價值との和) に等しいという主張に還元される。

かくのごとく、スミスは商品の價值を  $\llcorner$  十日 に分割し、第三の成分不變資本  $\llcorner$ 、即ち生産上に消費された生産手段の價值を見落しているのである。もつとも彼もこの部分を見ないわけには行かなかつたのであるが、彼はそれがまた同様に  $\llcorner$  十日 に歸着するものと考えたのである。彼はいう。「例えば、穀物の價格においては、第一の部分は地主の地代を支拂い、第二の部分はそれを生産するために使われた労働者および役畜「！」の賃銀または維持費を支拂い、更に第三の部分は農業者の利潤を支拂う。これらの三分は直接にかまたは結局においてか、穀物の全價格をなすもののように見える。或いは農業者の資本を償却するために、または彼の家畜その他の農業用具の磨損を補償するために、第四の部分が必要であると思われられるかもしれない。がしかし農業上の一さいの用具の價格、例えば耕馬の價格はそれ自身右の三分——即ち、その馬が飼育された土地の地代、それを飼育する

ための労働、およびこの土地の地代とこの労働の賃銀との兩者を前貸しするところの農業者の利潤——から成るものと考へなければならぬ。かくして穀物の價格は、馬の價格ならびに維持費を支拂うものには相違ないが、その全價格は直接にかまたは結局において、地代と労働〔賃銀のこと〕と利潤の右の三部分に分解せられるのである。<sup>24)</sup>しかしながら、これらの生産手段（スマスは労働手段のみを考えて原料を忘れてゐるのだが）、例えば馬や鋤を造り出すためには、馬飼いや鋤作りにとつて同様に労働手段（前者の場合には悉く他の馬）と原料（即ち飼料や鐵）を必要とするのであつて、これらの生産手段そのものの生産上に消費された生産手段の價格もまた、その生産手段の價格に入るのである。スマスはこのことを忘れてゐる。彼は一の生産部面から他の生産部面へ、この生産部面から更に第三の生産部面へと我々を曳きすり廻すだけで、問題を解決することができない。

スマスがこの誤謬に陥つたのは、彼が年々つくりられる生産物、價值と年々つくりられる價值生産物とを混同したためである。後者はその一年間における労働の生産物にすぎず、前者はそれ以上になお年生産物の生産上に消費された、前年度および部分的にはさらに以前の諸年度に生産されたあらゆる價值要素をも含む。即ち前者のうちには單に再現するにすぎない生産手段の價值も含まれてゐるのである。かかる混同によつてスマスは年生産物中の不變價值部分を追出したのである。そしてこの混同はまた、彼の基本觀念における他の誤謬に基きつてゐる。その誤謬とは労働の二重性、いいがえれば價值をつくり出すところの抽象的人間的労働と、使用價值をつくり出すところの具體的有用的労働とを區別しなかつたことである。労働は抽象的人間的労働としては生産手段の價值に新價值を附加し、具體的有用的労働としては生産手段の價值を生産物に委譲し、その價值を生産物において維持する。同じ時點における労働の成果の二面性はこのようにして生ずるのである。年生産物の總體はその一年間に

支出された有用の勞働の結果である。けれども年々の生産物價值についていえば、その一年間に造り出されたものはその一部分にすぎない。この部分こそ即ち、その年度の間に流動化された勞働の總量を代表するところの年々の價值生産物なのである。このことをスミスは理解しなかつた。

しかしさらにまた、スミスのこの混迷は彼の方法論上の缺陷に由來している。マルクスはいう。「それは主として商品價值一般についての彼の「科學的」(scientific) 見解が皮相的 (evangelisch) 見解とたえず交錯させられているからである。大體彼においてはこの皮相的見解の方が優勢なのであつて、ただ彼の科學的本能がときどき科學的な立場を再現させているにすぎない。」と。スミスのこの方法論上の二面性は、マルクスによつて他の個所で、次のやうに特徴づけられている。「スミス自身は非常な素朴さで絶えざる矛盾のうちに動搖している。一方では彼は、經濟上の諸範疇の內的關聯を——即ちブルジョアの經濟體系のかくれた構造を探究している。他方では彼は、これと並んで、競争という現象のうちに外觀的に與えられているところの、それゆゑに非科學的な觀察者に對して、それと全く同様にブルジョア的な生産過程に實際にとらわれており利害關係をもつている者に對して現われるやうな關聯を置いている。この二つの把握の仕方——そのうちの一つはブルジョアの體系的內的關聯を、いわばその生理を、つきとめるものであり、他の一つは生活過程の外面に現われているところのものを、その現われるがままに、記述し、分類し、物語り、體系化するやうな、概念規定のもとに齎すにすぎないものである——はスミスにあつては、平氣で併存しているばかりでなく、相互に交錯し、たえず矛盾しあつていのである。」<sup>20)</sup>

この内面的方法と外面的方法の矛盾という、方法論上の混亂こそ、スミスをして勞働の二重性、即ち抽象的人

間的労働と具體的有用的労働とを識別しえざらしめ、ついに「十日」のドグマを生むに至らしめた根本的原因であつたといえよう。だが同時に、抽象的間的労働が範疇的に定立されるのは、その歴史的發展の完全な成熟において、即ち工場制工業を生産的基礎とする確立した資本主義の段階においてであつて、マニエフアクチニア時代の經濟學者たるスミスにとつては、なおその認識のための現實的地盤が存在しなかつたことも認めなければなるが如し。

- (23) Marx, Das Kapital, Bd. II S. 372  
Smith, Wealth of Nations, Bk. I ch. VI Vol. I p. 62  
(24) Marx, Das Kapital, Bd. II S. 380  
(25) Marx, Theorien über der Mehrwert, Bd. II I. S. 2-3  
(26)

スミスはかくの如く、商品價値の構成部分から不變資本部分を除去したが、ケネーはこれに反して、「不變資本の價値が新たな形態に再現する」という、再生産過程上の重要な要素をすでに認めていた。<sup>27)</sup>のである。それはスミスがケネーに比して後退している點である。

註 ケネー（經濟表範式）にあつては、すでに述べたように、社會は生産階級、地主階級、および不生産階級の三階級に分れる。生産階級は、工産物たる原前拂（即ち、耕作設定の資本財産）一〇〇億（その消耗年額一〇億）および、農産物たる原前拂耕作労働のため年々なされるところの支出）二〇億を使用して、年總生産物（農産物）五〇億を生産する。生産階級は他に貨幣二〇億を保有し、これを地代として地主に支拂う。この再生産總額五〇億のうち三〇億だけが流通する。（地主階級に一〇億、不生産階級に二〇億。）その結果生産階級は貨幣二〇億を回収し、工産物一〇億を取得する。そのほかになお農産物二〇億が保有されており、これは流通せず、直接に生産階級の原前拂に使用される。また工産物一〇億は原前拂の消耗の補填に當てられる。これで生産階級にとつて次年度の再生産のための條件が成就する。

ここに我々は次のことを見る。即ち、生産階級においては原前拂の消耗年額一〇億および年前拂二〇億は總生産物五〇億中に再現し、そのうち原前拂の消耗年額に等しい生産物部分は流通過程を経て現物態において補填され、年前拂に等しい生産物部分は流通せずしてそのまま次年度の年前拂に轉用されるということ。ここに原前拂および年前拂はほぼ、スミス以後に採用された固定資本および流動資本に相等するものであつて、年前拂中には貸銀の支拂いに當てられる部分（可變資本）とともに種穀・飼料等流動不變資本部分をも含み、また原前拂は農具、役畜等であつてもとより不變資本中に含まれる。即ちケネーにあつては不變資本の價値は生産物において再現するのである。

しかしながら、ケネーが商品價値の構成部分の分析に成功したということができないばかりでなく、彼においてはそれを問題とすること自體が不可能であつた。ケネーにあつては、剩餘價値（純生産物）をつくり出すもの即ち生産的なるものはただ農業のみであり、しかもこの産業において實際に剩餘價値をつくり出すものは、人間の勞働ではなくして、自然であり、土地である。かくして彼は未だ價値一般をその實體即ち人間の勞働に還元し、價値の大きさを勞働量あるいは勞働時間によつて測定することができなかつたのである。しかるに價値を勞働に還元しないならば、商品價値をそれを構成する諸要素に分解することは本來不可能である。また彼にあつては、剩餘價値の唯一の形態は地代であつて、利潤や利子の存在は認められていないのであるから、これらのものを共通の一單位で表現することも不可能である。かくして商品價値の構成部分の認識は、ケネーにおいては未だ全く問題となりえないのである。

ここにおいて、アダム・スミスの重農學派フイシヤクを超えた大きな進歩に注目しなければならぬ。スミスは商品の價値をその生産に必要な勞働の量によつて決定する。また彼は利潤および地代が、勞働者の提供する剩餘勞働からのみ成立しうることを認め、かくしてそれらを共通の一單位に還元する。かくして商品價値の構成部分の分析の



問題は、スミスの經濟學において、はじめて提起せられたといつてよいであろう。

さて、スミスはこのように各個の商品の價值、ならびに年労働の生産物の價值を、賃銀・利潤・ならびに地代の三部分に分解するのであるが、かくては社會的總生産物の再生産の理解は全く不可能となる。そこで彼も迂路を経て第四の要素、即ち（不變）資本という要素を密輸入せねばならなかつた。それは總收入と純收入とを區別することによつてなされている。彼はいう。「ある大國のすべての住民の總收入とは、彼らの土地および労働の年々の生産物の總額をいう。純收入とは、第一には彼らの固定資本の、第二には彼らの流動資本の維持費を差引いて後に残る、自由な收入をいう。言いかえれば、これは彼らの資本を蠶食することなくして、彼らが直接の消費のために留保しておく資財に編入しうる收入、即ち彼らの生活必需品・便宜品・娯樂品に使うる收入である。」と。ここで、スミスのいつている純收入なるものは、年生産物のうち個人的消費に歸する部分に等しい。（だからこの純收入だけが賃銀・利潤・地代に、即ち  $\times + \text{日}$  に分解されるのである。）しかしその範圍は機能資本を侵してはならないのである。かくして、生産物の價值の一部は賃銀・利潤・または地代のいずれにも歸着せずして、資本に歸着するということになる。（ゆえに生産過程において消費された生産手段の價值、即ち不變資本の價值が回復される。）それは總收入のうち、純收入に入らぬ部分の價值である。けれども、生産物の價值構成部分のうち收入として受取られるものは、豫め生産物のうちに存在するところの部分だけである。もし資本を收入（總收入の一部）として受取るべきだとすれば、それは豫め生産上に支出されたものでなければならぬ。（即ち、商品の生産には可變資本とともに不變資本が必要であり、かくして生産物の價值は  $\times + \text{日}$  ではなくして、 $\circ + \text{日} + \text{日}$  であるということになる。）かくして、レーニン、のいうように、「ここでスミスは自分自身では氣附かずに、生産物の價值の三つ構成部分を認め

とに至っている。即ち、單に可變資本および剩餘價值のみならず、不變資本をもまた、<sup>39)</sup>「現實觀察者としてのスミスの科學的本能が彼自身の誤れる理論を打破したのである。そしてここに、商品價値の構成部分の科學的認識のための道が拓かれるに至つた。

Marx, Das Kapital, Bd. II S. 363

<sup>(28)</sup> Smith, Wealth of Nations, Bk. II ch. II Vol. I p. 270

<sup>(29)</sup> Lenin, Die Entwicklung des Kapitalismus in Russland, sämtliche Werke S. 28

## 五

以上、商品價値の構成部分の分析の問題における、スミスの誤謬と彼自身によるその打破とについて述べた。ここで再びさきの社會的總生産の區分の問題に立歸り、スミスがこの問題においていかに自己を揚棄してゆくかを見よう。

社會的總生産の農業と工業の二大部分への分割に基ずいては、社會的總資本の再生産と流通の過程の科學的分析は不可能であつた。しかるにスミスは、右とは異なる生産部門の分割に基ずく再生産論の構想を示している。即ち、彼はさきの總収入と純収入の區別につすいていう。「固定資本の維持費の全額は、明らかにこれを社會の純収入から除外せねばならぬ。彼らの事業上に有用な機械器具・彼らの収益用の建物等を維持するに必要な材料も、それらの材料を適當な形に捨てるのに必要な労働の生産物もいづれも純収入の一部をなすものではない。けれども右の如き労働の價格は正にその一部分でありうる。そのゆえはそういう仕事に備われた労働者は、彼の賃銀の全價値を直接消費のために留保せられる彼らの資財のうちに加えるからである。しかしながら他の種類の

勞働に至つては、その價格もその生産物も共に、この種の資財のうちに編入せられる。即ち、その價格はその勞働者のそれに、生産物はその勞働者以外の人々のそれに歸し、これらの人々の生活必需品、便益品、および娯樂品は、これらの勞働者の勞働によつて増加せられるのである。」と。ここに勞働の二つの種類を區別する必要の意識が現われている。スミスが「固定資本の維持」のための勞働と呼んでいるところのものは、機械器具建物等のような個人的消費のなかに決して入りえない對象物を提供する。これに反して「他の種類の勞働」と呼んでいるものは、純收入のなかに入りうるような消費資料を提供する。(ここでスミスは、その説明から原料一般の生産を除外しているが、この原料はまた決して個人的には消費されず、生産的のみ消費されるものであるから、それを生産する勞働は、當然このスミスの分類における第一の種類の勞働に含まれる。)これはまことに、「再生産の理論において、巨大な意義を有する重大な區別」である。即ち、それは事實上、生産手段を生産する勞働と消費資料を生産する勞働との間の區別である。

さて、第一の種類の勞働によつてつくられる生産物の價值のうちには、實銀に等しい價值部分が含まれている。しかしこの價值部分はその現物形態からいえば、消費しえない生産手段として存在しているのである。以上實銀についていつたことは、また利潤および地代の源泉となる價值部分についてもいえることであるが、スミスはこの點を忘れてゐる。これらの價值部分はすべて、第二の種類の勞働によつてつくられた消費資料との交換を通じてのみ、個人的消費の對象となりうるのである。さらにスミスは次の點をも見落している。年々生産される生産手段の價值のうち、この生産手段をつくるために消費された生産手段の價值に等しい部分は、その現物形態のみならずその資本としての機能によつても、收入を形成するあらゆる價值部分から絶對的に排除されているという

ことを。

次に第二の種類の労働、即ち消費資料の生産に従事する労働者たちについて、スミスのいうところは正確ではない。労働者は彼の労働の価格を、即ちそれによつて労働が支拂われる貨幣を食べて生活することはできない。

彼は消費資料を購買することによつてこの貨幣を實現するのである。なおスミスは利潤および地代となる價值部分、ならびに消費された生産手段の價值に等しい部分に觸れていないが、前者はこの種類の労働の生産した消費資料に實現され、後者は第一の種類の労働によつてつくられた生産手段との交換を通じて自己を回収する。そしてこの交換によつて、第一の種類の労働者・資本金家・および地主は消費資料をうるのである。

かくしてマルクスはいつてゐる。「スミスはほとんど問題を解決せんばかりのところ間違つてゐた。なぜなら、彼はすでに次のことを認めていたからである。即ち、社會の年々の總生産物のうちのある種のもの（生産手段）の價值の一定の諸部分〔可變資本および剩餘價值〕は、その生産に従事する労働者たちおよび資本金家たちの収入をなすものではあるが、しかしそれは社會の収入のなからの部分を形成するものではない。また、右の年々の生産物のうちの他の種のもの（消費資料）の價值の一部分〔不變資本〕は、その所有者たち、即ちそれを生産させた資本金家たちの資本價值を形成するけれども、しかも社會の収入の一部分たるにすぎない」と<sup>32)</sup>。そして右の兩部分は相互に交換によつて自己を實現し、且つ新しい生産のための現物形態を回復せねばならぬ。これは再生産の決定的條件であり、またマルクス再生産理論の根本的思想である。かくして、社會的總生産の生産手段・消費資料の二部門への分割に基づき再生産と流通の過程の理解は、スミスによつてすでに門戸を開かれていたといえるであらう。

(32)(31)(30) -Smith, Wealth of Nations, Pt. II ch. II Vol. I p. 270  
-Lenin, Die Entwicklung des Kapitalismus in Russland, sämtliche Werke S. 26  
Marx, Das Kapital, Bd. II, S. 371

## 六

以上我々は、マルクスの再生産表式の基礎的前提、即ち社会的生産の生産手段、消費資料の二部門への分割と生産物価値の不変資本、可變資本、剰餘価値の三部分への区分について、ケネーにおいてはこれらの問題自體が未だ問題となりえないのに反して、スミスにおいてはそれらが問題として提出せられ、そのあらゆる誤謬にも拘らず、解決への方向を含んでいることを見た。ここで、スミスの再生産論についての一の總括的な評價がなされなければならない。

マルクスは次のごとく述べている。「アダム・スミスは再生産過程の敘述においては、幾多の側面から見ても、その失墮者わけでも重農學派に較べれば、何ら前進していかないのみならず、決定的に後退している。」<sup>35)</sup>たしかに分折の鋭さと表現の嚴密さにおいて、スミスはケネーに劣るのみならず、すでに見たように、個々の點において、理論的に退歩している。しかるに、レーニンはこちらの事實を完全に認めつつ、しかもなお再生産論において、ケネー以上にスミスを重視すべきことを強調している。即ち彼は、「アダム・スミスこそ生産物は生産物と交換されるという眞理（重農學派もこれを知っていた）を認めることに止まらずして、社会的資本と生産物との各種の構成部分がそれらの價值上いかに補填されるか（實現されるか）の問題を提供したのである。」と確言し、それ故に、「マ

ルクスは……實現問題の歴史を討究するに當つて、重農學派に一頁半を割いているに反して、アダム・スミスには三十頁以上を割き、スミスの根本的誤謬——それを彼を繼承するすべての經濟學者（リカード、セイ、シスモンディ、J.S.ミル等）がそのまま受けついでいる——を詳細に検討しているのであると主張している。

かくしてローザ・ルクセンブルグの次のとき評價が當を得たものというべきではなからうか。「重農學派の簡潔な、嚴密な、しかも古典的に明瞭な表式は、アダム・スミスにおいては一見したところ混沌たる、諸概念と諸關係との混亂のうちに解消してしまつた。しかしこの混沌のなから、すでに不完全ながらも新しい、そしてケネーの場合よりもより深刻な、近代的な、しかも生々とした、社會的再生産過程の諸關係が現われてくる。しかしそれは、ミケランゼロの奴隸の大大理石像のように、未完成のままこの混沌のうちに包まれているのである。」<sup>35)</sup>と。再生産論の歴史において、ケネーとマルクスとを結びつける中間の環としての、アダム・スミスの地位が顧られねばならない。

しかし我々の結論としてはこれだけでは充分ではない。社會的總資本の再生産と流通の過程は、歴史的には先ず、現實的な農業と工業との社會的生産の二大部分の對立を基礎として認識された。この點は、ケネーにおいても、アダム・スミスにおいても同様である。そしてこの問題について、具體的にして詳細な分析をなしたことはスミスの貢獻であつた。しかしこの農業と工業との對立を基礎とするのみでは、社會的總資本の價值補填、素材補填の二重の過程の理解は不可能である。しかるに社會的生産の生産手段生産・消費資料生産の二部門への分割は歴史的には資本主義的工業の發展による生産手段生産の確立によつて、はじめて完全に現實的なものとなるのであり、又それによつて論理的に充分に成熟したものとなるのである。従つて産業革命前夜の經濟學者たるアダ

ム・スマイスには、その明確な把握は困難であつた。しかし彼はこの二部門分割の認識の萌芽を示している。資本主義は生産手段生産の確立によつて自己自身に立脚したものとなり、以後主として生産手段生産によつて發展する。(第一部門の第二部門よりも急速な増大)。この資本主義的生産の確立と發展、從つてまたその矛盾の成立と擴大の時代に、マルクスは生産手段・消費資料の二部門への分割に基づいて、社會的總資本の再生産と流通の過程の分析の基礎的理論を確立したのである。しかしながら、それは「社會的總資本の運動形態の總括」として、一般的抽象的理論たるにとどまつた。國民經濟の具體的な構造を把握するためには、生産手段生産、消費資料生産の二部門分割を基礎としながら、そのうえにさらに具體的な産業部門の區分——農業と工業、或いはより細分化された産業部門の區分——をとり入れた、再生産論の構想を必要とするのではなからうか。マルクス再生産理論の見地に立ちつつ、より一層の理論的前進と、現實への接近とを期するためには、それは重要な一課題となるであらう。その意味で、農業と工業との對立に基づく社會的總生産物の再生産と流通の秩序について、豊富な敘述を與えた。アダム・スマイスの再生産論も今日顧みらるべき價値があると考えられるのである。

Mary, Das Kapital, Bd. I S. 630

Lenin, Nochmals zur Frage der Theorie der Realisierung, sämtliche Werke II S. 406

(35)(34)(33)  
Luxemburg, Die Akkumulation des Kapitals, S. 28